永遠の真理

ETERNAL TRUTH

2016年 12月

「当局に対するわたしたちの義務」「永遠の生涯」「第七の封印：キリストの再臨」

永遠の真理

いま永遠の真理の土台の上に堅く立ちなさい。(3T p.45)

目次

今月の聖書勉強

「当局に対するわたしたちの義務」 4

聖書の教え

朝のマナ

「永遠の生涯」 7

今日のわたしの生涯

現代の真理

「第七の封印：キリストの再臨」 39

七つの封印と生ける神の印

力を得るための食事

「ホワイトシチュー」 48

お話コーナー

「戦いの日々（II）」 50

イエスの物語

教会

【正丸教会】

〒368-0071　埼玉県秩父郡横瀬町芦ヶ久保 1607-1
電話：0494-22-0465
FAX：0494-40-1045

【高知集会所】

〒780-8015　高知県高知市百石町 1-17-2
電話：088-831-9535

【沖縄集会所】

〒905-2261　沖縄県名護市天仁屋 600-21
電話：0980-55-8136

アクセス

ホームページ：http://www.4angels.jp
メール：support@4angels.jp

発行日　2016 年 11 月 30 日
編集＆発行　SDA 改革運動日本ミッション
〒368-0071 秩父郡横瀬町芦ヶ久保 1607-1

Illustrations: Dreamstime on front cover;
HighRes on pages 8, 52, bible masterpieces on back cover.

Printed in Japan

見上げよ、見上げよ

神の教会は、悪との戦いにおける最も暗黒な時代に、主の永遠の計画に関する啓示が与えられた。……将来の栄光に関するこれらの幻、すなわち神の手が描いた光景は、各時代の争闘が急速に終わりを告げ、約束の祝福があふるるばかりに与えられようとしている今日、神の教会にとって貴重なものでなければならない。

いにしえの預言者によって、教会に与えられた慰めの言葉は実に多かった。イザヤは、「慰めよ、わが民を慰めよ」と語るように、神の命令を受けた（イザヤ書 40:1）。そしてこの任命と共に、その後の各世紀を通じて信者の希望と喜びとなった驚くべき幻が与えられた。……

神はゆるしをお与えになる。十字架につけられ、よみがえられたわれわれの主イエスの功績によって、満ちあふれるばかりの嘉納が与えられる。イザヤは、主が彼の選民に宣言されるのを聞いた。「わたしこそ、わたし自身のためにあなたのとがを消す者である。わたしは、あなたの罪を心にとめない。……」（同 43:25）……

預言者は、罪と墓に勝利した人々が今、幸福そうに創造主のみ前にあって、人間が最初に神と語ったのと同じように親しく神と話し合っているのを幻の中で見た。……預言者は、喜びにわれを忘れて叫ぶのである。「すべてエルサレムを愛する者よ、彼女と共に喜べ、彼女のゆえに楽しめ」（イザヤ 66:10）。……

まさにその成就の瀬戸際に立っているわれわれにとって、来たるべきこれらの諸事件の描写はなんと意義深く、また生々しい関心事でなければならないことであろう。これは、われわれの祖先がエデンを去って以来、神の子供たちが待望し、祈ってきたできごとなのである。

旅行く友よ、われわれはまだ地上の活動の影と混乱のさ中にいる。しかし、間もなく救い主は現れて、救いと休息をお与えになるのである。われわれは信仰をもって、神のみ手によって描かれた幸福な将来を眺めよう。世の罪のために死なれたおかたは、彼を信じるすべての者に、パラダイスの門を広く開けておられるのである。……

見上げよ、見上げよ、絶えず信仰を増し加えよ。この信仰に導かれて、都の門を通って大いなる将来へと続く狭い道を行こう。それは贖われた者のために備えられた広く限りない輝かしい将来である。……

救われた諸国の人々は、天の律法のほかはどんな律法をも認めない。すべての者は賛美と感謝の衣服を着て、幸福な一致した家族となる。その光景に「明けの星は相共に歌い、神の子たちはみな喜び呼ばわ」る（ヨブ記 38:7）。そして神とキリストとは、声を合わせて、「もはや罪もなく、もはや死もない」と宣言される。（国と指導者下巻 322-334）

聖書の教えXII

18章　当局に対するわたしたちの義務

すべてのクリスチャンにとって国の法律に従うことは、それが神の律法に矛盾しない限り、義務です（ローマ 13:1–7）。

「エホバの十誡はすべての義なる良い法律の基礎である。神の戒めを愛する人々は国のすべての良い法律に従う。しかし、もし統治者の要求が神の律法と矛盾するようなものであれば、答えられるべき質問は次の一つである、『われわれは神に従うべきか、人に従うべきか』。」（教会への証 1 巻 361, 362）

クリスチャンは当局に敬意を払い（テトス 3:1; ペテロ第一 2:13, 14, 17）、忠実に自分たちの税金を支払い（マタイ 22:17–21; ローマ 13:7）、神が国を正義、秩序、平和、そして宗教の自由をもって祝福してくださるように、政府の男女のために祈ります（テモテ第一 2:1–3）。神のみ言葉はわたしたちが政治的な計画や党派的活動、反乱、流血あるいは戦争に参加することを許してはいません（ルカ 9:56; ヨハネ 18:36; マタイ 26:51, 52; 出エジプト記 20:13; ローマ 12:18–21）。しかしながら、わたしたちは良心的な反対者として、自分たちの信仰と矛盾しない方法で国家的な重要性を持つ働きを遂行し、社会の福祉に貢献する準備はできています。

すべての人に偏りのない正義が与えられ、それによって市民各自の宗教的な良心が尊重されることは、神のみ旨です。わたしたちが「主はこう言われる」に反して行動するよう要求される場合には、過去の神のしもべたちの模範に従わなければなりません。すなわち人よりは神に従うことです（ダニエル 3:14–18; 使徒行伝 4:18–20; 5:29）。

「その時以来、幾世紀にわたり、福音教会の創設者や神の証人たちが高くかかげてきた真理と宗教の自由の旗は、この最後の争闘においてわれわれの手にゆだねられている。この大いなる賜物の責任は、聖書の知識をさずけられた人々の上にかかっている。われわれは、聖書のことばを最高の権威として受け入れる。われわれは人間の政府を神が定められたものとして認め、合法的な範囲内でそれに従うことを、聖なる義務として教えなければならない。しかし、その要求が神のご要求と矛盾するときは、人間よりむしろ神に従わねばならない。神のみこ

とばをすべての人間の法律にまさるものとして認めねばならない。『教会がこう言う』、あるいは『国がこう言う』ということのために、『主がこう言われる』ということを放棄してはならない。キリストの王冠は、この世の主権者の王冠より高くかかげられねばならない。

われわれは、権威を無視するようには求められていない。法と秩序に反対する者と思われるようなことをしゃべったとして記録されることがないように、話す言葉でも、書く言葉でも、注意深く気をつけなければならない。われわれの道を不必要に閉ざすようなことを、言ったりしたりしてはならない。われわれはキリストのみ名によって前進し、ゆだねられた真理を擁護しなければならない。」(患難から栄光へ上巻 68, 69)。

「自分の国の法律が、シナイ山から聞こえる、み声で神によって語られ、後にこのお方ご自身の指で石に刻まれたより高い律法と矛盾しない限り、いかなる場合も従うことがわたしたちの義務である。『わたしの律法を彼らの思いの中に入れ、彼らの心に書きつけよう。こうして、わたしは彼らの神となり、彼らはわたしの民となるであろう』。神の律法が心に記された人は、人よりも神に従う。そして、神の戒めをほんのわずかにでも逸脱するよりは、むしろすべての人に従わないのである」(教会への証 1 巻 361)。

「神の律法を拡大し、高めることがわたしたちの働きである。神の聖なる言葉の真理が明らかにされなければならない。わたしたちは聖書を生活の規則として掲げるべきである。慎みをもって、恵みの精神のうちに、また神の愛のうちに、わたしたちは人々に主なる神こそ天地の創造主であり、第七日目が主の安息日であるという事実を指し示さなければならない。

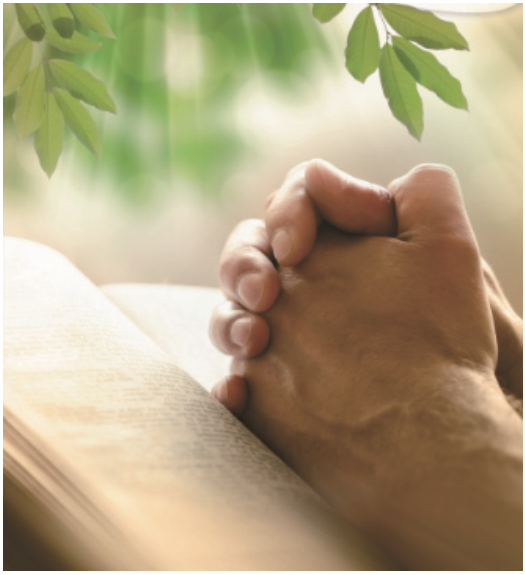
主の御名によってわたしたちは、このお方の旗を広げ、このお方の言葉を擁護して、前進しなければならない。当局がわたしたちにこの働きをしないよう命じるとき、すなわち彼らが神の戒めとイエスの信仰を宣布することを許さないとき、そのときこそ、わたしたちは使徒たちがしたように、次のように言う必要がある、『神に聞き従うよりも、あなたがたに聞き従う方が、神の前に正しいかどうか、判断してもらいたい。わたしたちとしては、自分の見たこと聞いたことを、語らないわけにはいかない』(使徒行伝 4:19, 20)」(同上 6 巻 395)。

「わたしたちは神を認め、このお方の律法、すなわち天における統治とこのお方の地上の統治全体の基礎を認める。このお方の権威は世の前に区別され、明

白にされているべきである。そしてエホバの律法と矛盾するものはいかなる法律も認められてはならない。もし神の取り計らいに反抗して、世がわたしたちの決定や行為に影響を及ぼすことを許すなら、神のご目的はくじかれる。どんなに口実がもっともらしくても、もし教会がこの点において揺れるならば、天の書のその名のところに、もっとも聖なる信任に対する裏切り、キリストの王国に対する背信と記されるのである。教会は全宇宙と世界の諸国の前に自分の諸原則を堅く断固として保持しなければならない。神の律法の誉と神聖さを維持することにおける確固たる忠誠は、世からでさえ注目と崇敬をひき、多くの人々は自分たちの見ている良い働きによって、わたしたちの天の御父に栄光を帰すように導かれるのである。」（牧師への証 16, 17）。

今日のわたしの生涯

My Life Today



12 月「永遠の生涯」

召しと選びとを確かにせよ

「兄弟たちよ。それだから、ますます励んで、あなたがたの受けた召しと選びとを、確かなものにしなさい。そうすれば、決してあやまちに陥ることはない。こうして、わたしたちの主また救主イエス・キリストの永遠の国に入る恵みが、あなたがたに豊かに与えられるからである。」（ペテロ第二 1:10,11）

ここに、神の王国でのわたしたちの永遠の命を保証する生命保険がわたしたちに提供されている。わたしはあなたに使徒ペテロのこれらの言葉を研究するようにと言いたい。一つ一つの文章に悟りと知性とがある。わたしたちにご自分の命を与えてくださった命の与え主をしっかりとつかむことによって、わたしたちは永遠の命を受けるのである。（原稿 99a、1908 年）

わたしたちは各々自分の永遠の運命を決定しつつある。そして、永遠の命を獲得するか否かはまったくわたしたち次第なのである。わたしたちは、キリストの偉大な教科書である神のみ言葉のうちに与えられた教訓に生きるであろうか。それは、もっとも壮大でありながら、もっとも単純に編集され、適切なふるまい、言葉、作法、愛情において教育を授けるために作成された書物の中でもっとも容易に理解できる書物である。それは、神の命で測る命のために人類を備えさせる唯一の本である。そしてこのみ言葉を日ごとに研究する者だけが、子供たちを上級学校へ入学させ、勝利にみちた征服者として冠を受けさせるために、彼らを教育し、訓練する資格を受けるのにふさわしい者なのである。

キリスト・イエスは、人間が永遠の命を受けるのにふさわしいかどうかを決める唯一のさばき主であられる。聖都の門は、謙遜で、柔和な、心低くこのお方に従ってきた者たち、このお方から自分たちの教訓を学び、このお方から生命保険を受けて、品性を神のみかたちにしたがって形成してきた人々に対してのみ開かれる。（同上 3、1906 年）

代価を支払われた者がこの地から贖われるとき、神の都はあなたに開かれるであろう。……そのとき、あなたの手に立琴が渡され、神と小羊を讃美するためにあなたの声があがる。このお方の大いなる犠牲によって、あなたはこのお方の性質にあずかり、神の王国で不死の嗣業を与えられるのである。（同上 99a、1908 年）

戒めを守る

「いのちの木にあずかる特権を与えられ、また門をとおって都にはいるために、彼の戒めを行う者たちは幸いである。」（黙示録 22:14 英語訳）

戦いはわたしたちの目前にある。わたしたちのうちだれにとっても、今唯一の安全は、神のうちにキリストと一つになることである。わたしたちは、狭い門のところで、中に入るために必死の努力をすべきである。しかしこの門は、ちょうつがいが緩んで開くような門ではない。それは、疑わしい品性が中に入ることを許さない。わたしたちは、自分の前におかれている賞与の価値に見合った熱心さをもって、今、永遠の命のために奮闘しなければならない。わたしたちにパラダイスの門が開かれるのは、金銭でも土地でも地位でもなく、キリストのような品性を持つことによってである。わたしたちに不死の冠を得させるのは、威厳でも、知的な偉業でもない。ただ、神を自分の能力としてきた柔和で心の低い者たちだけがこの賜物を受けるのである。……

魂を新しく創造し、闇から光を、敵意から愛を、不純から聖潔を生ずるのは、全能者のみわざだけである。無限のお方が人間の同意によって、品性に完全をもたらすためにたずさわられるみわざは、永遠の科学である。

キリストに与えられている栄誉とは何であろうか。何の強制力をも用いずに、また何の暴力も使わずに、このお方は人間の意志を神のみ旨に従わせて、一つにされる。これは、科学の中の科学である。なぜなら、それによって、思いと品性に大変化が起こるからである。これは、神の都の門をくぐる一人一人の生涯に起こらなくてはならない変化である。（手紙 155、1902 年）

そのとき、神の戒めを守ってきたものは、いのちの木の下で、不死の生気を呼吸する。そして、罪のない世界の住民は、永遠にわたって、この喜ばしい楽園〔エデン〕に、罪にのろわれなかった完全な神の創造のみわざの見本を見るとともに人間が創造主の栄光に満ちた計画を成就していたならば、全世界がどのようになったかという見本を見るのである。（人類のあけぼの上巻 52）

絶えず神と歩む

「エノクは神とともに歩み、神が彼を取られたので、いなくなった。」（創世記5:24）

神がご自分の教会員たちを天へ連れて行かれるとすれば、それは正しくこのお方に仕えることができるようにさせる力と知恵を上より受けつつ、彼らがこの地上でご自分と共に歩んできたからである。神のもとへ連れて行かれる者たちは、今へりくだりと悔悟のうちに祈り、その心がむなしいことに向けられていない男女である。（原稿 11、1901 年）

この生涯において、神のことを考え、語るのが少しも楽しくない者たちが、神がいつもご臨在なさり、ご自分の民と共に住まわれるところでの来たるべき生活を楽しむことはない。しかし、神のことを考えるのを愛する者は、天の大気を呼吸しつつ、本来自分のいるべきところにいることになるのである。地上にいながら天を思うことを愛する者たちは、その聖なる交わりと喜びのうちにあって幸福になる。……

地上にいるときに、彼らは自らを自分のものだと主張しなかったので、神は彼らをご自分のものとして印を押された。天国は、それを熱烈に望み、自分たちの求める対象の価値に見合った努力をする者たちのためにある。天を獲得する者たちの思いは、天の事柄にある。（ﾚﾋﾞｭｰ・ｱﾝﾄﾞ・ﾍﾗﾙﾄﾞ 1890 年 5 月 13 日）

「心の清い人たちは、さいわいである、彼らは神を見るであろう。」エノクは、三百年の間、天と調和するために心が清くなることを求めていた。彼は三世紀の間神と歩いた。彼は日々より密接な結合を熱望した。交わりはいよいよ深まっていき、ついに神は彼をみもとにお受けになった。彼は、永遠の世界の門口に立っていた。彼と祝福にみちた国との距離はわずか一歩であった。そして、門はあけられ、地上で長く続いた彼の神との歩みは続けられた。彼は、聖都の門を通っていった。彼は、人間のなかから、そこにはいる最初の人となった。（人類のあけぼの上巻 84）

信仰によって歩む

「わたしたちは、見えるものによらないで、信仰によって歩いているのである。」（コリント第二 5:7）

わたしたちは、自分自身を高めるためではなく、神の小さな子供として、このお方がわたしたちにゆだねてくださった働きを、自分の能力の最善を尽くして行うために、生きるべきである。他人に正しい印象を与えるのがわたしたちの仕事である。わたしたちは永遠のために、偉大な医者であるお方がどの目からも涙を拭い去ってくださり、また命の木の葉がその国民を癒すためにある、上なる療養所のために準備している。

みな、生きた信仰によってキリスト・イエスをつかみ、思いのへりくだりのうちに歩もうではないか。そうすれば神の恵みがわたしたちのうちに現れ、わたしたちはこのお方の救いを見るようになる。わたしたちは、あがなわれた者たちの聖なる家族にあいさつをするようになる。……わたしたちは、金の立琴を奏(かな)で、天は豊かな音楽が響き渡る。わたしたちは、自分たちのために勝利して下さったお方の足元にわたしたちの輝く冠を投げ出し、このお方に栄光を帰すのである。

そこには、わたしたちがここでは理解できないことがあるであろう。聖書のある部分は、わたしたちには神秘的に見える。なぜなら、それらはわたしたちの限りある理解力を超えているからである。しかし、わたしたちの救い主がわたしたちを生ける水の傍らに導かれるとき、以前ははっきりと理解しなかったことをわたしたちの思いに明らかにしてくださる。

わたしが将来の天の栄光を思うとき、わたしはすべての生ける魂がこのことについて知ることができるならと熱烈に願う。……わたしはこのお方を力強い癒し主として掲げたいと切望する。……

わたしたちにとって、天の事物を追い求めるのか、地上の事物を追い求めるのかというのは、大変重要なことである。地上のことはやがて過ぎ去る。昨今は、地上の富が大損害を受けている。「あちこちに地震が起こる」、そしていたるところに困難と障害とが見られる。しかし天の家族の一員、天の王の子となるために準備していることは、わたしたちの特権である（ﾚﾋﾞｭｰ・ｱﾝﾄﾞ・ﾍﾗﾙﾄﾞ 1907 年 8 月 8 日）

準備して待つ

「その日、人は言う、『見よ、これはわれわれの神である。わたしたちは彼を待ち望んだ。彼はわたしたちを救われる。これは主である。わたしたちは彼を待ち望んだ。わたしたちはその救を喜び楽しもう』と。」（イザヤ 25:9）

わたしは毎週続く恐ろしい大災害のことを聞くとき、自問する。これはいったいどういうことだろうか、と。もっとも恐怖を覚えるような災害が矢継ぎ早に続く。わたしたちは、どれほど頻繁に、多くの人命と富を奪う地震や台風、また火災や洪水による破壊について聞くことだろう。一見これらの大災害は、無秩序で不規則と思える力が勃発したように映るが、これらのうちに神のご目的を見て取れる。それらは、神が男女を自分たちの危険に目覚めさせようとなさる一つの手段なのである。……

神のさばきは地にある。それらは、厳粛な警告のうちに語る。「だから、あなたがたも用意をしていなさい。思いがけない時に人の子が来るからである。」……

わたしたちは、この地上歴史の最終場面に生存している。……わたしたちには、一瞬たりとも無駄にする時間はない。見張りの途中で眠っているところを見られないようにしよう。……どこでも男女に悔い改めて、来たるべき怒りから逃れるように説得しよう。彼らに直ちに準備に取り掛からせよう。なぜなら、わたしたちは、自分たちの前に何が待ち受けているのかほとんど知らないからである。……

このお方〔主〕は、まもなく来られるので、わたしたちはこのお方が現れるのを準備して待っていなければならない。ああ、このお方を見、このお方に贖われた者として迎えられるとは、どれほど栄光に満ちたことであろうか。……もし、わたしたちが、その麗しさのうちに王なるお方にお目にかかることさえできるなら、わたしたちは、永遠に祝福されるのである。わたしは、大声で叫びたい気持ちになる。「天に向かっているのだ！」と。わたしたちは、キリストが力と大いなる栄光のうちに、ご自分の買い取られた者たちを永遠の家郷に連れて行くためにおいでになる時に近づいている。…

最後の大きな働きにおいて、わたしたちは、どう扱ってよいかわからない困惑に直面するであろう。しかし、天の三人の偉大なみ力が働いておられることを、神のみ手が車輪の上に置かれており、神はご自分の約束を果たされることを忘れないようにしよう。このお方は、義のうちにご自分に仕える民を世からお集めになる。（教会への証 8 巻 252 ～ 254）

救出される神の民

「主にあがなわれた者は帰ってきて、その頭に、とこしえの喜びをいただき、歌うたいつつ、シオンに来る。彼らは楽しみと喜びとを得、悲しみと嘆きとは逃げ去る。」（イザヤ 35:10）

神が、ご自分の民を救うためにその力をあらわされるのは、真夜中である。太陽がその力強い光を放って現われる。しるしと不思議とが後から後から現われる。悪人たちはこの光景を、恐れと驚きとをもってながめる。一方義人たちは、自分たちの救いの前兆を厳粛な喜びで迎える。自然界の万物は、それぞれの軌道からはずれたように見える。……黒い厚い雲が現われて、互いに衝突する。この怒ったような天の真ん中に、一か所言うに言われぬ栄光に満ちた澄んだ空間があって、そこから神のみ声が、多くの水の音のように聞こえてきて、「事はすでに成った」と告げるのである。

その声が天と地とを震動させる。大地震が起こる。「それは人間が地上にあらわれて以来、かつてなかったようなもので、それほどに激しい地震であった」。大空は、開いたり、閉じたりするように見える。神のみ座からの栄光が、ひらめき渡るように見える。山々は、風にゆらぐ葦のように揺れ、ゴツゴツした岩があたり一面に飛び散る。……

墓が開かれる。「地のちりの中に眠っている者のうち、多くの者は目をさます……。そのうち永遠の生命にいたる者もあり、また恥と、限りなき恥辱をうける者もあるでしょう」。第三天使の使命を信じて死んだ者はみな、栄化されて墓から現われ、神がご自分の律法を守った者たちと結ばれる平和の契約を聞くのである。……

天から神のみ声が聞こえて、イエスのこられる日と時とが宣言され、永遠の契約が神の民に伝えられる。どんな雷鳴も及ばぬとどろきをもって、神のみ言葉が地上になりひびく。神のイスラエルは、耳を傾け、目を上方に注いで立っている。彼らの顔は神の栄光に照らされて、シナイ山から帰ってきたときのモーセの顔のように輝いている。悪人たちは、彼らを見つめることができない。神の安息日をきよく守ることによって神をあがめてきた者たちに、祝福が宣言されると、勝利の力強い叫びが起こる。（各時代の大争闘下巻 414 ～ 419）

キリストご自身がわたしたちのために来られる

「すなわち、主ご自身が天使のかしらの声と神のラッパの鳴り響くうちに、合図の声で、天から下ってこられる。その時、キリストにあって死んだ人々が、まず最初によみがえり、それから生き残っているわたしたちが、彼らと共に雲に包まれて引き上げられ、空中で主に会い、こうして、いつも主と共にいるであろう。だから、あなたがたは、これらの言葉をもって互に慰め合いなさい。」（テサロニケ第一4:16 〜 18）

イエスは来られる。雲と大いなる栄光と共に来られる。輝くみ使いの群集がこのお方に付き添っている。このお方はご自分を愛し、ご自分の戒めを守ってきた者たちに誉を与え、彼らをご自分の許へ連れていくために来られる。このお方は、彼らもご自分の約束もお忘れにならなかった。（ﾚﾋﾞｭｰ・ｱﾝﾄﾞ・ﾍﾗﾙﾄﾞ 1906 年 11 月 22 日）

まもなく、東のほうに、人の手の半分くらいの大きさの小さい黒雲が現われる。……神の民は、これが人の子のしるしであることを知っている。彼らは、厳粛な沈黙のうちに、その雲が地上に近づくのを見つめる。……ついには大きな白い雲となって、下のほうには焼き尽くす火のような栄光が輝き、上のほうには契約のにじがかかっている。イエスは、偉大な勝利者としておいでになる。……

生きている雲が、さらに近づくと、すべての目は、いのちの君をながめる。いまはその聖なる頭を傷つけるいばらの冠はなく、その聖なる額には栄光の冠がある。そのみ顔は、真昼の太陽よりもまぶしく輝く。「その着物にも、そのももにも、『王の王、主の主』という名がしるされていた」。……天は巻物が巻かれるように消えていき、地は、王の王の前に震え、すべての山と島とは、その場所から移されてしまう。……

地がよろめき、いなずまがひらめき、雷がとどろく真っただ中で、神のみ子の声が、眠っている聖徒たちを呼び起こす。……地の前面にわたって、死者はその声を聞き、聞く者は生きる。……どの人もみな、永遠の若さの新鮮さと活力にあふれてよみがえる。……

生きている義人たちは、「またたく間に、一瞬にして」変えられる。彼らは、神のみ声によって栄化された。今や彼らは不死の者とされて、よみがえった聖徒たちとともに、空中において主に会うために引き上げられる。（各時代の大争闘下巻 419 〜 424）なんというすばらしい再会であろう。（初代文集 463）

キリストの戴冠式

「全能者にして主なる神よ。あなたのみわざは、大いなる、また驚くべきものであります。万民の王よ、あなたの道は正しく、かつ真実であります。」（黙示録15:3）

その日には、あがなわれた者たちは、御父と御子の栄光のうちに輝く。天の御使たちは金の立琴をかなで、王と、このお方の戦利品である者たち、すなわち小羊の血によって洗われ、白くされた者たちを歓迎する。勝利の歌が全天を満たして、鳴りわたる。キリストは征服なさったのだ。このお方は、ご自分の贖われた者たち、すなわちご自分の苦難と犠牲の使命が無駄ではなかったという証人たちに伴われて、天の宮廷にお入りになる。（レビュー・アンド・ヘラルド 1904 年 11 月 24 日）

聖都の上はるか高く、光り輝く純金の基の上にみ座がある。そのみ座の上に神のみ子が座し、そのまわりを神のみ国の民がかこんでいる。キリストの力と威光は、言葉や文字で描写することができない。永遠にいます父なる神の栄光が、み子をおおっている。その臨在の輝きは聖都に満ち、門の外にあふれ、さらにまた全地にあふれている。

み座のいちばん近くには、かつてサタンの業に熱心であったが、火の中からの燃えさしのように取り出されて、深い熱心な信仰をもって救い主に従ってきた者たちがいる。その次には、虚偽と不信仰のただ中にあってキリスト者の品性を完成した者たち、キリスト教界が神の律法は無効であると宣言した時にも律法を尊重した人たち、さらに、各時代にわたり、信仰のために殉教した無数の人たちがいる。そしてその向こうには、「あらゆる国民、部族、民族、国語のうちから、数えきれないほどの大ぜいの群衆が、白い衣を身にまとい、しゅろの枝を手に持って、御座と小羊との前に」立っている。彼らの戦いは終わり、彼らの勝利は獲得された。彼らは走るべき行程を走り、ほうびをもらった。

天と地の全住民が集合している前で、神のみ子の最終的な戴冠式が行なわれる。（各時代の大争闘下巻 449, 450）

キリストはわたしに冠と立琴を授けられる

「今や、義の冠がわたしを待っているばかりである。かの日には、公平な審判者である主が、それを授けて下さるであろう。わたしばかりではなく、主の出現を心から待ち望んでいたすべての人にも授けて下さるであろう。」（テモテ第二 4:8）

神の都に入る前に、救い主は、ご自分に従う者たちに、勝利の象徴を与え、王族のしるしを授けてくださる。輝く行列は、主なるイエスのまわりに四角形をつくる。イエスのお姿は、聖徒たちや天使たちよりも高く堂々としており、そのお顔からは、慈悲深い愛の輝きが、彼らの上にあふれ出ている。数えきれないほど多くの、あがなわれた者たちの視線は、すべてイエスの上にそそがれ、「顔だちは、そこなわれて人と異なり、その姿は人の子と異なっていた」お方の栄光を、すべての目がながめる。勝利者の頭には、イエスご自身が右の手で、栄光の冠をかぶせてくださる。すべての者のために、その人の「新しい名」と「主に聖なる者」ということばが刻まれた冠がある。すべての者の手には、勝利者のしゅろの枝と輝く立琴とが授けられる。そして、指揮する天使たちが合図の音をかき鳴らすと、すべての者の手はたくみに立琴をかなで、すばらしい音楽の美しい調べがわき起こる。すべての者の心は、言葉に言いあらわすことのできない感激に心がふるえ、すべての声は、「わたしたちを愛し、その血によってわたしたちを罪から解放し、わたしたちを、その父なる神のために、御国の民とし、祭司として下さったお方に、世々限りなく栄光と権力とがあるように」と感謝の賛美をささげる。（各時代の大争闘下巻 425, 426）

ああ、わたしたちを愛してくださったお方を見るとは、ご自身をわたしたちのために与えるほどわたしたちを愛してくださったお方をその栄光のうちに見るとは、なんと言葉に尽くしがたい喜びであろう！わたしたちの贖いのためにかつて刺し貫かれたその御手が、祝福と歓迎のうちにわたしたちに伸ばされるのを見るとは。（ｻｲﾝｽﾞ・ｵﾌﾞ・ﾀｲﾑｽﾞ 1882 年 11 月 2 日）

自分の身を神の御手のうちにおく……者たちは、……王をその麗しさのうちに見るのである。彼らは、このお方の比類なき魅力を眺め、自分たちの金の立琴をかなでて、全天を豊かな音楽と小羊への歌で満たすのである。（ﾚﾋﾞｭｰ・ｱﾝﾄﾞ・ﾍﾗﾙﾄﾞ 1905 年 6 月 15 日）

義の白い衣を与えられる

「彼らは大きな患難をとおってきた人たちであって、その衣を小羊の血で洗い、それを白くしたのである。」（黙示録 7:14）

忠実な働き人が、神と小羊の御座の周りに集められるときに授けられる報いは、栄光に富んだものである。……彼らは、御座の前に立ち、愛せられるお方のうちに受け入れられる。彼らのすべての罪は、取り除かれ、彼らのすべてのとがは取り去られている。今や彼らは、神の御座の栄光をありのままながめることができる。……その日には、あがなわれた者たちは、御父と御子の栄光のうちに輝く。御使たちは金の立琴をかなで、王と、このお方の戦利品たち、すなわち小羊の血によって洗われ、白くされた者たちを歓迎する。（教会への証 9 巻 285）

すべての者は、一致した家族であり、讃美と感謝の衣、すなわちキリストの義の衣をまとって幸せである。すべての自然はその優れた麗しさのうちに、神に絶え間ない讃美と敬愛の感謝を捧げる。世界は天の光に浴する。年月は喜びのうちに流れる。月の光は太陽のようになり、太陽の光は今の七倍になる。この光景を見て、明けの明星たちは相共に歌い、神とキリストがそろって、「罪もなく、死ももはやない」と宣言なさるときに、神の子らは喜んで叫ぶ。……

争闘は終わった。すべての苦難と苦闘は終わりを告げた。贖われた者が神の御座の周りに立つとき、勝利の歌が全天に満ちる。すべての者は喜びの歌をかなでる。「ふさわしい、ほふられて再び生きておられる、勝利を収めた征服者である小羊こそはふさわしい」。

「その後、わたしが見ていると、見よ、あらゆる国民、部族、民族、国語のうちから、数えきれないほどの大ぜいの群衆が、白い衣を身にまとい、しゅろの枝を手に持って、御座と小羊との前に立ち、大声で叫んで言った、『救は、御座にいますわれらの神と小羊からきたる』」。（ﾚﾋﾞｭｰ・ｱﾝﾄﾞ・ﾍﾗﾙﾄﾞ 1903 年 11 月 26 日）

死に対する勝利

「〔神は〕人の目から涙を全くぬぐいとって下さる。もはや、死もなく、悲しみも、叫びも、痛みもない。先のものが、すでに過ぎ去ったからである」（黙示録 21:4）

わたしたちには、生きておられるよみがえられた救い主がおられる。このお方は、ご自分が墓の中に三日の間横たわられた後、その足かせを壊し、勝利のうちに借りたヨセフの墓の上で「わたしはよみがえりであり、命である。」と宣言なさった。そして、このお方は来られる。わたしたちは、このお方のために準備をしているであろうか。わたしたちは、もし、眠りにつくことがあっても、イエス・キリストのうちにある望みをもってそうする準備ができているだろうか。……

命の与え主はまもなく、墓の足かせを壊すために……来られる。このお方は、虜たちを助け出される。……彼らが最後に考えたことは、墓穴と墓であった。しかし、今や彼らは「死よ、おまえのとげは、どこにあるのか。死よ、おまえの勝利は、どこにあるのか」と叫ぶ。彼らが最後に感じたのは、死の苦悶であった。……彼らが起きあがるとき、痛みはすべて消え去っている。「死よ、おまえの勝利は、どこにあるのか」。ここに彼らは立っており、不死の最後の仕上げが彼らになされる。そして、彼らは空中で自分たちの主にお会いするために上るのである。神の都の門は、ちょうつがいで勢いよく開かれる。……そして、神の身代金を払っていただいた者たちは、ケルビムとセラピムの間を通って歩いていくのである。キリストは、彼らを歓迎し、ご自分の祝福をお与えになる。「良い忠実な僕よ、よくやった。……主人と一緒に喜んでくれ」。その喜びとは何か。このお方は、自分の魂の苦しみにより光を見て満足される。……ここには、わたしたちが夜の間、そのために神に嘆願した人がいる。わたしたちが、その死の床にあって話した人がいる。その人は、自分の無力な魂をイエスにゆだねたのである。ここに、あわれな大酒飲みだった者がいる。わたしたちは、彼を救うのに力のあるお方に彼の目を留めさせようと努めたのであった。そして、キリストは彼に勝利を賜わることがおできになると伝えたのであった。彼らの頭には、不死の栄光の冠がある。（原稿 18、1894 年）

そこには、そう、そこには何の失望も、悲しみも、罪も、「わたしは病気だ」という者もない。そこには葬式の列も、嘆きも、死も、別離も、張り裂けた心もない。そして、イエスがそこにおられる。そこには平安がある。……このお方のご臨在に満ちみちた喜びがある。このお方の右手に永遠の喜びがあるのである。（サインズ・オブ・タイムズ 1892 年 2 月 8 日）

もはや罪はない

「のろわるべきものは、もはや何ひとつない。神と小羊との御座は都の中にあり、その僕たちは彼を礼拝し、御顔を仰ぎ見るのである。彼らの額には、御名がしるされている。」（黙示録 22:3, 4）

あらゆる災いの跡は一掃される。……思い出させるものがただ一つある。われわれの救い主は、永遠に十字架の傷跡をとどめられるのである。主の傷ついたみ頭に、その脇腹に、その手と足に、罪の残酷なしわざの唯一の跡がある。預言者ハバククは栄光のキリストを見て、「その光は彼の手〔脇腹―英語訳〕からほとばしる。かしこにその力を隠す」と言っている。人類を神に和らがせる真紅の血潮がほとばしり出た、主の突き通された脇腹―そこに救い主の栄光があり、そこに主の力が隠れている。主は贖いの犠牲によって、「救いを施す力ある」お方となられたので、神のあわれみをあなどった者たちに対しては、強い態度でさばきを執行されたのである。救い主の屈辱のしるしこそは、救い主の最高の栄誉である。カルバリーの傷跡は永遠にわたって、主への賛美を示し、主の力を宣言する。……

炎の剣によってアダムとエバがエデンからしめ出されて以来、聖徒たちが待ちこがれていたところの、「神につける者が全くあがなわれ」る時がきた。もともと人にその王国として与えられたのに、サタンの手に売り渡され、長い間強力な敵に占領されてきた地が、大いなる贖いの計画によって再びもどされたのである。罪によって失われたいっさいのものは回復された。……地上が贖われた者たちの永遠のすみかとなる時、地を創造された時の神の最初の目的が達成される。「正しい者は国を継ぎ、とこしえにその中に住むことができる」。（各時代の大争闘下巻 460 ～ 463）

そこで、わたしたちはやむことのない来るべき永遠の時代を通じて、世のあらゆる栄光をこのお方と一緒に享受するのである。……神の王国では、何一つ、妨害したり、悩ませたりするものはない。これは、勝利者に約束された生涯、すなわち幸福と平安の生涯、愛と美の生涯である。……そこには、罪もなく、悩ませるような心配事もない。住民の平安を害するようなものは何もないのである。（サインズ・オブ・タイムズ 1887 年 11 月 10 日）

世継として、わたしたちは王国を受け継ぐ

「わたしの父に祝福された人たちよ、さあ、世の初めからあなたがたのために用意されている御国を受けつぎなさい。」（マタイ 25:34）

贖われた群衆の前には、聖都がある。イエスは、真珠の門を広くあけられる。そして、真理を守ってきた諸国の民がその中へ入る。そこに彼らは、神のパラダイス、すなわちアダムが罪を犯す前のふるさとを見る。その時、人間の耳が今まで聞いたどんな音楽よりも豊かな美しいあの声が、「あなたがたの戦いは終わった。」「わたしの父に祝福された人たちよ、さあ、世の初めからあなたがたのために用意されているみ国を受けつぎなさい」と言われる。

ここで、「あなたがわたしに賜わった人々が、わたしのいる所に一緒にいるようにして下さい」と弟子たちのために祈られた救い主の祈りが成就する。キリストは、ご自分の血によって贖われた者たちを、「その栄光のまえに傷なき者として、喜びのうちに」父の前に示し、「わたしはここにおります。そして、あなたがわたしに下さった子供たちもおります。」「あなたがわたしに下さったものを、わたしは守りました」と言われる。ああ、なんという驚嘆すべき贖いの愛であろう。無限なるお方であられる天父が、贖われた者たちをごらんになって、罪による不調和が消え、罪ののろいが除かれ、人性が再び神性と調和して、そこに神のみかたちをごらんになる時の、その喜びはどんなであろう。（各時代の大争闘下巻 426 ～ 427）

こうして、あがなわれた者は、イエスがかれらのために備えられた住居に迎えられるのである。……彼らは悪魔に打ち勝ち、神の恵みによって完全な品性を形づくった人々である。この地上で彼らを苦しめたあらゆる罪の傾向、あらゆる不完全さは、みな、キリストの血によって除かれ、太陽の輝きよりはるかにすぐれたキリストの栄光の美と輝きが、かれらに与えられるのである。そして、かれらを通して輝く人格の美、キリストの品性の完全さは、とうていこの世の外見の麗しさの及ぶものではない。かれらは神の大いなる白きみくらの前に罪なき者とせられ、天使たちの尊厳と特権にあずかるのである。（キリストへの道 176, 177）

家族は再び一つになる

「主はこう仰せられる、あなたは泣く声をとどめ、目から涙をながすことをやめよ。あなたのわざに報いがある。彼らは敵の地から帰ってくると主は言われる。あなたの将来には希望があり、あなたの子供たちは自分の国に帰ってくると主は言われる。」（エレミヤ 31:16, 17）

キリストは雲に乗って大いなる栄光のうちにこられる。……主は、死人をよみがえらせ、生ける聖徒たちを栄光から栄光へ変えるためにこられる。……家族はふたたび一緒になる。（各時代の希望下巻 98）

ああ、なんというすばらしい贖いであろう。これこそ長い間、語り、熱望し、熱心な期待をもって瞑想してきたことであった。……

生きている義人たちは、「またたく間に、一瞬にして」変えられる。彼らは、神のみ声によって栄化された。今や彼らは不死の者とされて、よみがえった聖徒たちとともに、空中において主に会うために引き上げられる。天使たちは、「天のはてからはてに至るまで、四方からその選民を呼び集める。」小さい子供たちは、天使たちに抱かれてきて、母親の腕に返される。長く死に別れていた友人たちは再会して、もう永久に別れることなく、喜びの歌をうたいながら、ともに神の都へと上っていく。（各時代の大争闘下巻 424, 425）

言い尽くせない喜びをもって、親は自分の子供に与えられる冠、上衣、立琴を見る。希望と恐れの日々は終わったのである。……彼らの子供たちは贖われたのである。（ｻｲﾝｽﾞ・ｵﾌﾞ・ﾀｲﾑｽﾞ 1886 年 7 月 1 日）

わたしたちは、パラダイスのどちらを見渡しても美しい木々を見るであろう。それらの真ん中には命の木がある。そこで、わたしたちは、回復されたエデンの美しさを曇りのない視力で眺めるのである。そこでわたしたちは、自分の贖い主の足元にこのお方がわたしたちの頭に載せてくださった冠を投げだし、自分たちの金の立琴をかなでて、御座に座っておられるお方に讃美と感謝を捧げるのである……どうか、あなたがたが皆、真珠の門を通ってわたしたちの神の都に入る人々の中にいるように。あなたがたが、全員そろった家族として、永遠の休息の港に住むように。この目標のために、神が、今あなたが命の冠のために苦闘するのを助けてくださるように。（ﾚﾋﾞｭｰ・ｱﾝﾄﾞ・ﾍﾗﾙﾄﾞ 1903 年 9 月 3 日）

わたしたちは互いにだれかがわかる

「わたしの知るところは、今は一部分にすぎない。しかしその時には、わたしが完全に知られているように、完全に知るであろう。」（コリント第一 13:12）

天上の住まいでは、わたしたちは、二度と別れることはない。わたしたちは自分たちの天の家郷で互いに分かるであろう。（ｻｲﾝｽﾞ・ｵﾌﾞ・ﾀｲﾑｽﾞ 1911年6月20日）

贖われた者たちは、掲げられた救い主に自分たちの注意を向けてくれた者たちに出会い、だれであるかがわかる。彼らはこれらの魂とどんなに祝福された言葉を交わすことであろう。「わたしは、世にあって神もなく、希望のない罪人でした。そこにあなたがわたしのところへ来て、わたしの注意をわたしの唯一の望みとして尊い救い主に向けてくれたのです」と述べられる。……また他の者は、「わたしは、異邦の地にある異邦人でした。あなたは、自分の友と快適な故郷を後にして、わたしにどのようにしてイエスを見出し、このお方を唯一の真の神として信じるかを教えに来てくれました。わたしはわたしの偶像を粉砕して、神を礼拝しました。そして、今このお方に顔と顔をあわせてお会いしています。わたしは救われました。永遠に救われました。わたしが愛するお方をいつも眺めるのです……」というであろう。

また他の者は、飢えた者に食べ物を施し、裸の者に着せてくれた人々に感謝を表すであろう。「わたしが不信のうちに絶望に縛り付けられていたとき、希望と慰めの言葉を語るために、主があなたをわたしに遣わされました」。「あなたは、わたしの肉体的な必要のために食物を持ってきてくれました。そして、あなたは、わたしに神のみ言葉を開き、わたしの霊的な必要を呼び覚ましてくれました。あなたは、わたしを兄弟として扱ってくれました。あなたは、悲しみのうちにあるわたしに同情し、わたしの打たれて傷ついた魂を回復してくれました。だから、わたしは、わたしを救うために伸ばされたキリストの御手をつかむことができたのです。わたしが無知なときに、あなたは、天にわたしのことを心にかけてくださる御父がわたしにいることを忍耐強く教えてくれました。あなたは、わたしに神のみ言葉の尊い約束を読んでくれました。あなたはこのお方がわたしを救ってくださるという信仰を吹き込んでくれました。わたしの心は、キリストがわたしのために払ってくださった犠牲を深く考えるときに、和らげられ、鎮められ、砕かれました。……わたしは、今救われてここにいます。永遠に救われて、このお方のご臨在のうちに生き、常にわたしに命を与えてくださったお方を讃美するためにここにいます」。

そこでこれらの贖われた者たちが自分たちのために重荷を負ってくれた人々に出会い、挨拶するとき、いかなる喜びがあることであろう。そして、自分自身を喜ばせるためではなく、わずかな祝福しかない気の毒な者たちの祝福となるために生きてきた人々の心は、どれほど満ち足りて胸が躍ることであろうか。（ﾚﾋﾞｭｰ・ｱﾝﾄﾞ・ﾍﾗﾙﾄﾞ 1905年1月5日）

美しい国

「もしその出てきた所のことを考えていたなら、帰る機会はあったであろう。しかし実際、彼らが望んでいたのは、もっと良い、天にあるふるさとであった。だから神は、彼らの神と呼ばれても、それを恥とはされなかった。事実、神は彼らのために、都を用意されていたのである。」（ヘブル 11:15、16）

未来の嗣業をあまりにも物質的なものに思わせはしないかとの恐れから、それをわれわれの住いとして見るようにと教えられている真理そのものを霊的なものにしてしまう人が多い。キリストは弟子たちに、わたしはあなたがたのために父の家に住むところを備えに行くのだとはっきり言われた。神のみ言葉の教えを受け入れる者は、天の住いについて全く無知ではない。しかもなお、「目がまだ見ず、耳がまだ聞かず、人の心に思い浮びもしなかったことを、神は、ご自分を愛する者たちのために備えられた」のである。人間の言葉では、義人の受ける報いを十分に描写することはできない。それは見るものだけがわかるであろう。限りある人知では、神のパラダイスの栄光を理解することができない。

聖書の中では、救われた者の嗣業が「ふるさと」と呼ばれている。そこでは天の大牧者イエスが、ご自分の群れを生ける水の源に連れて行ってくださる。いのちの木は月ごとにその実を結び、その葉は万民のために用いられる。水晶のように透きとおった川が永遠に流れ、そのそばにはゆれ動く木々が、主に贖われた者たちのために備えられた道の上に影を投げかけている。（各時代の大争闘下巻 463）

草は生き生きとした緑で、決してしおれることがない。そこでは、バラやユリなど、ありとあらゆる種類の花がある。それらは、枯れることも、色あせることも、その美しさや香りを失うこともない。

ここではわたしたちが恐れおののき怖がっているししは、そこでは、小羊とともに伏し、新地ではすべてが平和で調和している。新地の木々は、まっすぐで損なわれることなく気高くそびえ立っている。（ユース・インストラクター 1852 年 10 月 1 日）

新地では、肌を刺すような風もなく、不快な変化もない。大気は常に好ましく、健康的である。（日記 1859 年 3 月 24 日）

命の木から食べる

「都の大通りの中央を流れている。川の両側にはいのちの木があって、十二種の実を結び、その実は毎月みのり、その木の葉は諸国民をいやす。」（黙示録 22:2）

み座から清い水の川が流れ出ていて川の両側に命の木があった。……その実は見事で、銀の混じった金のようであった。（初代文集 17）

エデンの園の命の木の実には、超自然的な力があった。それを食べると永遠に生きるのであった。その実は死の解毒剤であった。その葉は、命と不死を維持するためにあった。……罪の侵入以来天の農夫は命の木を天上のパラダイスに移植された。（教会への証 8 巻 288）

ここで神を愛し、このお方の戒めを守ってきた贖われた聖徒たちには、都の門を通って入り、命の木にあずかる権利がある。彼らは、わたしたちのはじめの両親が堕落する前に命じられたように、自由にそれから取って食べるのである。そのいっぱいに広がった不死の木の葉は、諸国民を癒すためにある。彼らのすべての悲哀はすでに過ぎ去った。疾病、悲しみ、死を二度と感じることはない。なぜなら、命の木の葉が彼らを癒したからである。イエスはそのとき、すなわち、悲しみと労苦と苦悩をこうむり、呪いの下でうめいていた贖われた者たちが、不死の実を食べるために命の木の周りに集められるのをごらんになるとき、ご自分の魂の光を見て満足される。その木にあずかる権利を、わたしたちのはじめの両親は神の戒めを破ることによって完全に喪失したのであった。二度と命の木の実を食べる権利を失う危険はない。なぜなら、はじめの両親を罪に誘惑した者は、第二の死により、滅ぼされるからである。（ｴｰｽ・ｲﾝｽﾄﾗｸﾀｰ 1852 年 10 月 1 日）

いのちの木には大そう美しい実がなっていた。聖徒たちはそれを自由に食べることができた。……どんなことばでほめたたえてみても、天の栄光と比類のない救い主の愛の深さを描写することはできない。（初代文集 465, 466）

婚宴の席で

「小羊の婚宴に招かれた者は、さいわいである。」(黙示録 19:9)

旧約聖書にも新約聖書にも、結婚関係はキリストとその民との間に存在するやさしく聖なる結合をあらわすのに用いられている。婚宴のよろこびは、キリストがご自分の花嫁を天父の家につれてゆかれ、あがなわれた者とあがない主とが、小羊の婚宴の席にすわるその日のよろこびをキリストの心に思わせた。キリストはこう言われる、「花婿が花嫁を喜ぶようにあなたの神はあなたを喜ばれる」。「あなたはもはや『捨てられた者』と言われず、……あなたは『わが喜びは彼女にある』ととなえられ、……主はあなたを喜ばれ」る。「彼はあなたのために喜び楽しみ、その愛によってあなたを新にし、祭の日のようにあなたのために喜び呼ばわられる」。使徒ヨハネは、天の事物についてのまぼろしが与えられた時、こう書いた、「わたしはまた、大群衆の声、多くの水の音、また激しい雷鳴のようなものをきいた。それはこう言った、『ハレルヤ、全能者にして主なるわれらの神は、王なる支配者であられる。わたしたちは喜び楽しみ、神をあがめまつろう。小羊の婚姻の時がきて、花嫁はその用意をしたからである』」。「小羊の婚宴に招かれた者は、さいわいである」。

イエスはひとりびとりの魂を、神のみ国への招待を与えられなければならない者としてごらんになった。(各時代の希望上巻 176)

み国を受けたのちに、彼はご自分の民を救うために、王の王、主の主として栄光のうちに来られる。そして彼らは、天国で「アブラハム、イサク、ヤコブと共に宴会の席に」つき、小羊の婚宴にあずかるのである。(各時代の大争闘下巻 143)

わたしたちの天の家郷の栄光

「城壁は碧玉で築かれ、都はすきとおったガラスのような純金で造られていた。都の城壁の土台は、さまざまな宝石で飾られていた。」（黙示録 21:18,19）

神の栄光に満ちた都には十二の門があり、それは最も栄光に満ちた真珠で飾られている。またそこには、さまざまな色の十二の台がある。都の通りは、純粋な金でできている。この都には、神の御座がある。そこから、純潔で美しい川が流れているが、その清らかさは水晶のようである。その輝く純潔と美しさは、神の都を喜ばせている。聖徒たちは、命の川の癒しの水を自由に飲む。……すべての顔は自分たちの贖い主の形を映している。そこには、不安な困惑した顔色はない。皆が明るく、しみのない純潔さのうちに微笑んでいる。そこには天使たちがいて、また殉教者と共に復活した聖徒たちもいる。あらゆるものの中で最上のものがある。そしてわたしたちをもっとも喜ばせるのは、わたしたちがこの幸福と自由を享受するために苦しみ死なれたわたしたちの麗しい救い主が、そこにおられることである。———このお方の栄光に満ちた御顔は、太陽よりも明るく輝き、美しい都を明るくし、あたりに栄光を反射させている。

子供たちがいる。彼らは喧嘩や仲たがいをすることがない。彼らの愛は熱烈で聖い。彼らはまた、その頭に冠をかぶり、手には立琴をもっている。そして彼らの小さい顔は、地上ではよく困惑したり当惑したりするのを見るが、天では聖なる喜びに輝くのである。それらは彼らの完全な自由と幸福を表現している。……聖徒たちは、自分たちの頭に栄光の冠をかぶっている。そして手には金の立琴を持っている。彼らは金の立琴を弾いて、贖いの愛を歌い、神に音楽を捧げる。彼らのこの世での先の試みや苦しみは、忘れられ、新地の栄光のうちに失せてしまう。そして、イエスは彼らを喜ばれ、いつも微笑みかけておられる。彼らの幸福は完全なものとなる。……

聖徒たちの将来の住まいは実に栄光に満ちたものである。（ユース・インストラクター 1852 年 10 月 1 日）

楽しみと喜びのための労働

「彼らは家を建てて、それに住み、ぶどう畑を作って、その実を食べる。彼らが建てる所に、ほかの人は住まず、彼らが植えるものは、ほかの人が食べない。わが民の命は、木の命のようになり、わが選んだ者は、その手のわざをながく楽しむからである。」（イザヤ 65:21, 22）

広々とひろがった平野の果ては、美しい丘となって盛りあがり、神の山々が高くそびえ立っている。この平和な平原に、また生ける流れのほとりに、久しい年月の間旅人であり寄留者であった神の民が、そのすまいを見いだすのである。

「わが民は平和の家におり、安らかなすみかにおり、静かな休み所におる。」（各時代の大争闘下巻 463, 464）

贖われた人々は、新しい地において、最初アダムとエバに幸福をもたらした仕事と楽しみに従事する。彼らはエデンの生活をする。それは楽園と畑の生活である。「彼らは家を建てて、それに住み、ぶどう畑を作って、その実を食べる……。」

そこではあらゆる能力が発達し、あらゆる才能が増し加わる。どんな大事業も遂行され、どんなに高遠な抱負も達成され、どんなに遠大な目的も実現される。それでもなお、さらに越えるべき新しい高さ、感嘆すべき新しい驚異、理解しなければならない新しい真理、知、徳、体の能力を要する新しい目的が現れる。（国と指導者下巻 332, 333）

天には確かに仕事があるし、それがなくなることはない。贖われた者たちの全家族は、夢心地の怠惰の状態で生きるのではない。安息日の休みが、神の民のために残されている。天では、活動は疲れるものでも負担でもない。それは、安息なのである。贖われた者の全家族は、創造と贖いによって神のものであり、そのお方に仕えることに自分たちの喜びを見出す。（手紙 11、1899 年）

重荷を負って、疲れている者たちにとって、また信仰のよき戦いを闘ってきた者たちにとって、それは栄光に満ちた安息である。なぜなら、若さと不死の活力が彼らのものであり、罪とサタンに対して彼らは二度と闘わなくてよいからである。（クリスチャンの節制と聖書の衛生 99）

調和した社会生活

「測りなわは、わたしのために好ましい所に落ちた。まことにわたしは良い嗣業を得た。」（詩篇 16:6）

神ご自身が魂にうえつけられた愛と同情とは、そこで最も真実な、最も美しいものとして発揮される。聖者たちとのきよい交わり、聖なる天使たち、及びその衣を小羊の血で洗って白くした各時代の忠実な者たちとの、むつまじい社会生活、「天と地の全家族」を一つに結びつける聖なるきずな―こうしたものが、贖われた者たちの幸福となる。（各時代の大争闘下巻 465, 466）

贖われた群衆の中には、雄々しいパウロや熱心なペテロ、愛し愛されたヨハネなどキリストの使徒たちや、真実な心の持ち主であったその兄弟たちがおり、彼らとともに大勢の殉教者たちがいる。（同上 453）

天には喜びが満ちている。そこでは人類の贖いのためにこれほどの驚くべき犠牲を払われたお方への讃美が鳴り響く。地上の教会が讃美で満ちるべきではないだろうか。クリスチャンは、キリストに仕える喜びを世にあまねく広めるべきではないだろうか。天で讃美を歌う天使の聖歌隊に加わる者は、地上で天の歌を、感謝の旋律を学ばなくてはならない。（教会への証 7 巻 244）

天にあるすべてのものは気高く、高尚である。すべての者は、他人の利益と幸福を求めている。だれ一人として、自分自身に目や心を配ることに専心している者はない。すべての聖なる者たちにとって、自分の周りにいる者たちの喜びと幸福を目撃するのが、もっとも大きな喜びなのである。（同上 2 巻 239）

もし、あなたがここで試練に会い、孤独を感じるなら、この暗い世から目を転じて、天の輝く栄光を見なさい。天の喜びを思いみるならば、あなたはこの生涯での試練や失望をそれほど深く感じることはない。なぜなら、あなたには、そこに栄光のうちにある住まい、冠、立琴、そして麗しい救い主がおられると感じるようになるからである。神がご自分を愛し、ご自分の戒めを守る者たちに約束してくださった祝福された嗣業のために熱心に励みなさい。（ユース・インストラクター 1852 年 10 月 1 日）

永遠にわたって神の知恵を研究する

「どうか、わたしたちの主イエス・キリストの神、栄光の父が、知恵と啓示との霊をあなたがたに賜わって神を認めさせ、あなたがたの心の目を明らかにして下さるように。」（エペソ 1:17, 18）

贖いの科学は、科学の中の科学、御使いや堕落しなかった知的存在者たちの研究課題である科学、わたしたちの主なる救い主の注意をひく科学、無限のお方の思いの中で温められていたご目的に入り込む科学である。「とこしえより沈黙の保たれてきた」、神のあがなわれた者たちが永遠にわたって研究する科学である。これは、人が携わることのできる最高の科学である。他のどの研究とも異なり、思いをよみがえらせ、魂を高揚する。……

贖いの主題は、御使たちがうかがい見たいと願っているものである。それは、永遠にやむことのない月日を通じて贖われた者たちの科学であり歌である。今、それは注意深い思考と研究に値しないであろうか。……

主題は尽きることがない。キリストの受肉、このお方の贖罪の犠牲、そして仲保者としてのみ働きに、時が続く限り、勤勉な生徒の思いがめぐらされるのである。そして、数えられない年月を費やして天を仰ぎつつ、彼は「偉大なのは信心の奥義である」と叫ぶ。

わたしたちは永遠の間、地上で得ることが可能であった教えを受けていたなら、自分の理解力に明らかにされていたはずのことを学ぶ。贖いの主題に、永遠を通じて、贖われた者たちの心と思いと舌とが用いられる。彼らは、キリストが弟子たちに明らかにしたいと願っておられたが、弟子たちにそれをつかむ信仰がなかった真理を理解する。永遠から永遠にわたって、キリストの完全と栄光の新しい見地が明らかになる。終わることのない年月にわたって忠実な家の主人であられるお方が、新しいものと古いものとを、その倉から取り出してくださる。（ｻｲﾝｽﾞ・ｵﾌﾞ・ﾀｲﾑｽﾞ 1906 年 4 月 18 日）

神は無限のお方であり、またこのお方のうちにあらゆる知恵の富があるので、わたしたちは、永遠にわたって探り、学んでも、このお方の知恵、このお方のいつくしみ、このお方の力の富は尽きることがない。（同上 1906 年 4 月 25 日）

キリストが贖われた者たちを教えてくださる

「彼らはみな神に教えられるであろう」（ヨハネ 6:45）

キリストの学校ではだれ一人卒業することはない。生徒たちの中には年配者も若者も共にいる。神なる教師の教えに注意を払う者たちは、知恵と精錬と魂の高尚さにおいて絶えず進歩する。こうして、彼らは高等学校に入る準備をしているのである。その学校では、永遠に進歩し続ける。……

祝福された者たちのこの家郷に永遠に住むこと、魂と体と霊に罪とのろいの暗いしるしではなく、わたしたちの創造主とまったく同じ姿を帯びること、たえず新しい思想の分野を探索し、たえず新しい不思議と新しい栄光を見出し、たえず知り、楽しみ、愛する能力を増し加えながら、まだわたしたちには及ばない無限の喜びと愛と知恵があることを知りつつ、終わりのない月日を通じて、知恵と知識と聖潔において前進すること――これが、クリスチャンの希望が指し示している目的である。（グッド・ヘルス 1882 年 8 月）

来たるべき世界では、キリストが、贖われた者たちを命の川のほとりに導き、彼らに真理の驚くべき教訓をお教えになる。キリストは彼らに自然の奥義を開かれる。彼らは主人なるお方の手が世界をその位置に保っておられるのを悟る。彼らは偉大な芸術家の技能が、野の花の彩りのうちに表されているのを見て、すべての光線をお与えになる恵み深い御父のご目的を学ぶ。そして聖天使たちと共に、贖われた者たちは感謝の讃美の歌の中で、感謝しない世界に対する神の最高の愛を認めるのである。そこで、「神はそのひとり子を賜わったほどに、この世を愛して下さった。それは御子を信じる者がひとりも滅びないで、永遠の命を得るためである」ことが理解される。（ﾚﾋﾞｭｰ・ｱﾝﾄﾞ・ﾍﾗﾙﾄﾞ 1907 年 1 月 3 日）

このお方〔キリスト〕は、知識の豊かな蓄えをお与えになる。このお方は、ここの生涯では理解できなかった神の摂理における奥義を明らかにされる。（手紙 242、1908 年）

わたしたちは、ここで、永遠にわたって神と共に生きることができる教育を受けなくてはならない。わたしたちがここで始める教育は、天で完成される。わたしたちは、進級するにすぎない。（原稿 16、1895 年）

はるかかなたの世界へ旅する

「彼らは、女にふれたことのない者である。彼らは、純潔な者である。そして、小羊の行く所へは、どこへでもついて行く。彼らは、神と小羊とにささげられる初穂として、人間の中からあがなわれた者である。」（黙示録 14:4）

宇宙のすべての宝は、贖われた神の民が研究するために開放される。死ぬべき人間という拘束を受けないで、彼らは、はるかに遠い他世界―人間の悲惨な光景を見て悲しみに身を震わせ、一人の魂が救われた知らせに歓喜の歌をひびかせた他世界―へ、疲れも覚えず飛行する。言葉では言い尽くすことのできない喜びをもって、地上の子らは、他世界の住民たちの喜びと知恵にあずかる。世々にわたって神のみ手の業を熟視して得られた知識と悟りの宝に、彼らは共にあずかる。くもりのない目をもって、彼らは創造の栄光を見つめる。すなわち、もろもろの太陽や星や天体が、おのおのその定められた軌道を通って、神のみ座の周囲を運行しているのを見るのである。最も小さなものから最も大きなものに至るまで、すべてのものの上に、創造主のみ名が書きしるされ、すべてのものらの中に神の力の富が示されている。

永遠の年月が経過するにつれて、神とキリストについてますます豊かでますます輝かしい啓示がもたらされる。知識が進歩していくように、愛と尊敬と幸福も増していく。人々は神について学べば学ぶほど、ますます神のご品性に感嘆するようになる。イエスが彼らの前に、贖いの富と、サタンとの大争闘における驚くべき功績とをお示しになると、贖われた者たちの心はいっそう熱烈な献身の念に燃え立ち、いよいよ喜びに満たされて黄金の立琴をかき鳴らし、万の幾万倍、千の幾千倍の声が一つになり、賛美の一大コーラスとなって盛りあがる。……

大争闘は終わった。もはや罪はなく罪人もいない。全宇宙はきよくなった。調和と喜びのただ一つの脈拍が、広大な大宇宙に脈打つ。いっさいを創造されたお方から、いのちと光と喜びとが、無限に広がっている空間に流れ出る。最も微細な原子から最大の世界に至るまで、万物は、生物も無生物も、かげりのない美しさと完全な喜びをもって、神は愛であると告げる。（各時代の大争闘下巻 466, 467）

天使たちの合唱を聞く

「するとたちまち、おびただしい天の軍勢が現れ、御使と一緒になって神をさんびして言った、『いと高きところでは、神に栄光があるように、地の上では、み心にかなう人々に平和があるように』」。（ルカ 2:13,14）

この世に生まれた者のうち、神の子らの中でもっとも才能に恵まれた子でさえ、ベツレヘムでお生まれになった幼な子ほど喜びの表現をもって迎えられた者はない。（ﾚﾋﾞｭｰ・ｱﾝﾄﾞ・ﾍﾗﾙﾄﾞ 1906 年 4 月 5 日）

御使たちは……ベツレヘムの平原で自分たちの群れの番をしていた謙遜な羊飼いたちに現れた。……主の御使たちは、彼らのところに来て、「恐れるな。見よ、すべての民に与えられる大きな喜びを、あなたがたに伝える。きょうダビデの町に、あなたがたのために救主がお生れになった。このかたこそ主なるキリストである。あなたがたは、幼な子が布にくるまって飼葉おけの中に寝かしてあるのを見るであろう。それが、あなたがたに与えられるしるしである」。彼らの目が一人の御使の栄光に輝く臨在に慣れるや否や、見よ、平原全体が、ベツレヘムの平原を満たした御使の群集の驚くべき栄光で輝いていた。……すべてが神を讃美して、「いと高きところでは、神に栄光があるように、地の上では、み心にかなう人々に平和があるように」と告げていた。

それから、天の調べが死すべき人間の耳に聞こえ、彼らが永遠に覚えられる聖歌を閉じたときに、天の聖歌隊は天へと引き上げた。光は消えていった。……しかし、羊飼いたちの心には、死ぬべき人間がかつて目にした中で最も明るい光景と、わたしたちの世に、人間の救い主が来られるという祝福の約束と保証が残った。それは、彼らの心を、信仰と神に対する驚くべき愛の混じった喜びと嬉しさで満たした。（同上 1884 年 12 月 9 日）

ああ、今日、人類家族がその歌をみとめることができるように。その時なされた布告、その時うたわれた歌の調べは、世の終りまで高まり、地のはてまでひびき渡るのである。義の太陽キリストが、翼にいやしの力をそなえて昇られるとき、その歌は、大水のひびきのように、「ハレルヤ、全能者にして主なるわれらの神は、王なる支配者であられる」と声をあげる大群衆によってふたたびうたわれるのである。（各時代の希望上巻 34）

共に礼拝する

「わたしが造ろうとする新しい天と、新しい地がわたしの前にながくとどまるように、あなたの子孫と、あなたの名はながくとどまると主は言われる。『新月ごとに、安息日ごとに、すべての人はわが前に来て礼拝する』と主は言われる。」（イザヤ66:22, 23）

世の初めに、天父とみ子は、創造の働きののちに安息日を休まれた。「天と地と、その万象とが完成した」とき、創造主は天のすべての住民とその輝かしい光景をながめてよろこばれた。「かの時には明けの星は相共に歌い、神の子たちはみな喜び呼ばわった」のであった。……

「神が聖なる預言者たちの口をとおして、昔から預言しておられた万物更新の時」になっても、創造の安息日、すなわちイエスがヨセフの墓で休まれたこの日は、やはり休息とよろこびの日となるのである。救われた諸国の民が「安息日ごとに」よろこびの礼拝をもって神と小羊を拝するとき、天と地は声を合わせて賛美するのである。（各時代の希望下巻 293, 294）

救われた諸国の人々は、天の律法のほかはどんな律法をも認めない。すべての者は讃美と感謝の衣服を着て、幸福な一致した家族となる。その光景に「明けの星は相共に歌い、神の子たちはみな喜び呼ばわ」る。……

『新月ごとに、安息日ごとに、すべての人はわが前に来て礼拝する』と主は言われる。』「こうして主の栄光があらわれ、人は皆ともにこれを見る。」「主なる神は義と誉とを、もろもろの国の前に、生やされる。」「その日、万軍の主はその民の残った者のために、栄えの冠となり、麗しい冠となられる」。（国と指導者下巻 334, 335）

天と地がつづくかぎり、安息日は、創造主の力のしるしとしてつづくのである。そしてエデンがふたたびこの地上に栄えるときに、神の聖なる休日は、天下のすべての者によってあがめられるのである。（各時代の希望上巻 363）

神と自由に交わる特権

「わたしは、この都の中には聖所を見なかった。全能者にして主なる神と小羊とが、その聖所なのである。」（黙示録 21:22）

神の民は天父とみ子とに自由に交わる特権がある。「わたしたちは、今は、鏡に映して見るようにおぼろげに見ている」。われわれは神のみ姿が、自然界のみ業と人間に対する神の取り扱いとに反映しているのを、ちょうど鏡の中に見るように見ている。しかしその時には、中間にうすぐらい幕をはさまずに、顔と顔とを合わせて神を見る。われわれは神のみ前に立ち、そのみ顔の栄光を見るのである。（各時代の大争闘下巻 465）

わたしたちは、親愛の情を感じさせる「われらの父よ」という名でこのお方に話しかけることができる。これは、わたしたちのこのお方への愛情のしるしであり、このお方のわたしたちに対する優しい思いと関係の誓いである。そして神の御子は、恵みの嗣業を眺めながら、「彼らを兄弟と呼ぶことを恥とされない」。彼らは神に対して、堕落したことのない天使たちよりももっと神聖な関係を持っている。

人間の心の水路を通じて世代から次の世代へと伝えられてきたすべての父性愛も、また人間の魂に開かれてきた優しい泉もすべて、無限の尽きることのない神の愛と比べたら、際限のない大洋に対するほんの小川に過ぎない。（レビュー・アンド・ヘラルド 1908 年 10 月 22 日）

天国はキリストを通してたえず神に近づくことである。幸福な天国にいればいるほどますます栄光がわれわれに示されるであろう。神について知れば知るほど、われわれの幸福はまし加わるであろう。（各時代の希望中巻 53）

そして、神にお会いすること以上に天で幸せなことがあろうか。キリストの恵みによって救われた罪人にとって、神の御顔を見上げ、このお方を御父として知ること以上に大きな喜びがあるであろうか。（教会への証 8 巻 268）

わたしたちが眺めることによって、このお方に似たものにされるために、信仰の目をもって、ここでこのお方を見上げることは、どれほどの慰めをもたらすことであろう。しかし、おぼろげな覆いを間にはさまずに、このお方をありのままに見るなら、それはどんなであろうか。（バイブル・エコー 1892 年 1 月 15 日）

覆いは取り去られる

「今は、鏡に映して見るようにおぼろげに見ている。しかしその時には、顔と顔とを合わせて、見るであろう。」（コリント第一 13:12）

そこで、われわれの眼をくもらせていた覆いが取り除かれて、今は顕微鏡で垣間見ただけの美しい世界を目の当たりに眺めるとき、また今は望遠鏡を通してかなたに見渡しているにすぎない諸天の栄光を目の当たりに見るとき、また罪の傷あとを取り除かれて、全地が主なる神エホバの美しさにつつまれて現わるとき、なんというすばらしい研究の分野がわれわれの眼前に開かれることであろうか！そこでは科学の学徒が創造の記録を読んでも悪の法則のなごりはどこにもみあたらない。自然の声の音楽に耳をかたむけても、嘆きの音色や悲しみの低音はきかれない。すべての被造物の中に一つの筆跡だけが目につき、広大な宇宙に神のみ名が大きく書かれているのが見えるだけで、地にも海にも空にも悪の面影は何一つ残っていない。……

そこでは無限の広さと言いあらわし得ない価値を持った歴史が生徒の前に開かれるであろう。この世においても生徒たちは神のみ言葉という有利な立場を通して広大な歴史の分野について見解があたえられ、人間社会の事件の経過を支配する原則についてかなりの知識を得ることができる。しかしやはり人間の目は曇っており、知識は不完全である。永遠の光の中に立つまでは、すべてのことをはっきり見ることは不可能である。

目に見える世界と目に見えない世界をさえぎっていた覆いが取り除かれて、ふしぎに思われていた事がらが明らかにされるであろう。……

無我の精神で働いてきた人々は、そこに自分たちのほねおりの結果を見るであろう。あらゆる正しい原則と尊い行為の成果が見られるであろう。……世界の最も尊い働きの結果は、この世においてはそれをなした本人にもほとんどわからないのである。……親も教師も最後の眠りにつくときに、自分の一生の働きは空しかったように思われるかもしれない。彼らは、自分の忠実さによって開かれた祝福の泉から小やみなく水が流れ出ていることを知らない。……その影響が幾千回となくくりかえされることを知るのである。……来世ではこうしたすべての働きとその結果が明らかにされるであろう。（教育 354 ～ 357）

わたしは、わたしの保護天使に会う

「あなたがたは、これらの小さい者のひとりをも軽んじないように、気をつけなさい。あなたがたに言うが、彼らの御使たちは天にあって、天にいますわたしの父のみ顔をいつも仰いでいるのである。」（マタイ 18:10）

永遠の光の中に神の摂理が明らかにされるまでは、われわれはどんなに天使たちに守られ助けられていたかを知ることができない。天使たちは人間世界のできごとに積極的な役割を果たしてきたのである。光り輝く衣をまとって現われたり、旅人の服装をした人間となって現われたのである。彼らは人の家庭でもてなしを受けたり、道に行き暮れた旅人を案内したりしたのである。彼らは敵の意図をくじき、破壊者の手をとどめたのである。

この世の為政者たちはしらないが、天使たちが彼らの会議に発言したことは幾度もある。人間の目に彼らの姿が見え、人間の耳に彼らの訴えが聞こえたのである。会議室や法廷で、天の使者たちは迫害と圧制を受けている者たちのために弁護したのである。彼らは神の子らに災いと苦難をもたらすような目的をくじき、悪をとどめたのである。……

あがなわれた者はだれでも、自分の一生における天使たちの奉仕を理解するであろう。生まれたときからわれわれを守ってくれた天使、われわれの歩みを見守り、危険の日にわれわれの頭上をおおってくれた天使、死の陰の谷にあってわれわれと共にいた天使、われわれの最後のいこいの場所に目をとめていてくれた天使、よみがえりの朝まっさきに迎えてくれる天使―この天使と語らい、自分の一生における神の摂理と人類のためのあらゆる働きにおける天の協力について話を聞くことはどんなにすばらしいことであろう。

人生の経験におけるあらゆる複雑な問題はその時明らかにされるであろう。われわれの目には混乱と失望、目的の破壊や計画の妨害としかみえなかったことが、堂々たる圧倒的な勝利の目的、天との調和であったことがわかるであろう。（教育 356，357）

なぜ大争闘が許されたのか

「更にまた、万物の造り主である神の中に世々隠されていた奥義にあずかる務がどんなものであるかを、明らかに示すためである。それは今、天上にあるもろもろの支配や権威が、教会をとおして、神の多種多様な知恵を知るに至るためであって」(エペソ 3:9, 10)

各時代にわたって大争闘がつづけられたのは何のためであったろうか。サタンが反逆の最初に存在を消滅されなかったのはなぜであろうか。それは悪に対する神の処置を通して、宇宙が神の正義を知り、悪が永遠の宣告をうけるためであった。救済の計画には、永遠にわたってきわめつくすことのできない高さと深さがあり、天使たちも見たいと願っている驚異がある。すべての被造物の中で、あがなわれた者だけが自己の経験を通して罪との実際の戦いを知っているのである。彼らはキリストと共に働き、天使たちすらあずかり得なかったキリストの苦難を共にしたのである。……

神は「キリスト・イエスにあって、共によみがえらせ、共に天上で座につかせて下さったのである。それは、キリスト・イエスにあって神の恵みの絶大な富を、きたるべき世々に示すためであった」とある。(教育 359, 360)

救われた諸国民が、贖い主を見て、そのみ顔に天父の永遠の栄光が輝いているのをながめるとき、また、永遠から永遠にいたるイエスのみ座をながめ、イエスのみ国には終わりがないことを知るとき、彼らはどっと歓喜の歌声をあげるのである。……

あわれみ、やさしさ、父としての愛情が、聖潔、公平、力と入りまじって見える。われわれは、高くかかげられた神のみ座の威光をながめる一方では、神のご品性の恵み深いあわれみを見て、「われらの父よ」というあの永遠に続く称号の意味を、いままでになく理解するのである。……

救い主が悪の権力と戦われた結果は、贖われた者たちに与えられる喜びであり、永遠にわたって神にみ栄えを帰することである。(各時代の大争闘下巻 434)

わたしは目標を目ざして走る

「兄弟たちよ。わたしはすでに捕えたとは思っていない。ただこの一事を努めている。すなわち、後のものを忘れ、前のものに向かってからだを伸ばしつつ、目標を目ざして走り、キリスト・イエスにおいて上に召して下さる神の賞与を得ようと努めているのである。」（ピリピ 3:13, 14）

あなたの生涯の一年が今日また閉じようとしている。あなたは、この一年をどのように振り返ることができるだろうか。あなたは、神聖な生涯において進歩したであろうか。あなたは自己を愛情と世と共に十字架につけたであろうか。あなたは、ますます神のみ言葉の研究に対して関心を持つようになったであろうか。あなたは、自分自身の感情と強情に対して断固とした勝利を得てきたであろうか。ああ、永遠に過ぎ去り二度と取り戻すことのできないあなたの生涯におけるこの一年の記録はどんなものであったであろう。

あなたが新しい一年に入ろうとするにあたって、真剣な決心をもって、あなたの行く道が前へ上へと向かう一年となるようにしなさい。あなたの生涯がこれまでよりさらに高められ、高尚なものとなるようにしなさい。あなたの目標を自分自身の関心や楽しみを求めるものとしてはならない。そうではなく、あなたのあがない主の働きを前進させることを目標としなさい。あなたは常に自らを助ける必要がある立場や、あるいは他人があなたを狭い道にとどめておくために見張らなければならないような立場にとどまっていてはならない。あなたは、いつも他人に善をなし、悲しんでいる者を慰め、弱い者を強くし、そしてどこでも機会のあるときにはキリストのために証を担うために、自分の魂の関心が目覚めているところにいることができる。すべてのことにおいて、いつも、どこにいても神に誉れを帰すことを目標としなさい。あなたの宗教をすべてのことに持ち込みなさい。（教会への証 2巻 261, 262）

今まで表したことがなかったほどの熱心さをもって、永遠のために準備しなさい。聖書を愛するように、祈祷会を愛するように、そして何よりも、魂が神と交わる時間を愛するようにあなたの思いを教育しなさい。あなたが、天の住まいで天の聖歌隊と一つになりたいのであれば、天を中心に考える者となりなさい。……

記録する天使の書物の中で新しいページが繰られる。……そこに残される記録が人と天使の目にさらされても恥ずかしくないものとなるようにしなさい。（同上 268）

研究 12

七つの封印と生ける神の印

第七の封印：キリストの再臨

わたしたちは今、第六の封印の時、すなわちキリストが預言された再臨のしるしが起こりはじめてから、キリストが再臨されるまでの期間に生存しています。そして、前回、この再臨前の審判の日に「だれが立ち得るだろうか?」との厳粛な問いをあげる人々に対して、黙示録 7 章の中に答えがあることを見ました。

そこにわたしたちは、ご自分のしもべらを守られる生ける神の「印する働き」を見ることができます。この働きは、キリストの権威によってなされており、すべて心から求める人に対する完全な答えです。

では、生ける神の印とは何でしょうか。

生ける神の印—第七日目の安息日

主は「わたしはまた彼らに安息日を与えて、わたしと彼らとの間のしるしとした」と言われます（エゼキエル 20:12）。それはこのお方が世のはじめに、天地創造を記念して週の第七日目を祝福し、聖別されたときに起源をもっています（創世記 2:1）。先月、数字の 7 にどのような意味があるかを見ましたが、この 7 こそ、働きの完全さと完成を表すものなのです。

黙示録に数多くの数字の 7 があるが、これは完全を意味します。

創世記に数字の 7 の起源を見いだします（創造の一週）。

第七日目の安息日がなければ、創造は完成することはありませんでした。

真の安息日と安息日を守る教会がなければ、創造の働きも贖いの働きも、完成することはありませんでした。

「七の数字は完全を表し、これらの メッセージが時の終わりまで及んでいることを象徴している。……」(患難から栄光へ下巻 290)

「こうして天と地と、その万象とが完成した。神は第七日にその作業を終えられた。……」(創世記 2:1-3)。

「わたしたちはこのお方の満ちみちた徳を求めているであろうか。つねにわたしたちの前に置かれた目標―このお方のご品性の完全―を目指して押し進んでいるであろうか。主の民がこの目標に到達するとき、彼らの額には印が押される。御霊に満たされて、彼らはキリストにあって完全となり、記録天使が『すべてが終わった』と宣言するのである」(わたしたちの高い召し 150)。

そうです。神様の印は完全な働きを表し、その印は完全な働きが完成した時に押されます。

では、なぜこの第七日目の安息日が生ける神の印なのでしょうか?

これがその理由である

「わたしはまた彼らに安息日を与えて、わたしと彼らとの間のしるしとした。これは主なるわたしが彼らを聖別した(聖化する) ことを、彼らに知らせるためである」(エゼキエル 20:12)。

「主は、同じ預言者によって、『あかしをたばねよ。律法をわが弟子たちのうちに印せよ』と命じておられる (イザヤ書 8:16 英語訳)。神の律法の印は、第四条の戒めの中に見いだされる。」(各時代の大争闘下巻 175)。

「安息日は、特に論争点となっている真理であるから、忠誠の大試金石となる。最後のテストが人々を襲うとき、神に仕える者と神に仕えない者の区別が明らかになる。……一方は、地上の権力に服従するしるしを受け入れることによって、獣の刻印を受け、他方は、神の権威に対する忠誠のしるしを選んで、神の印を受けるのである」(各時代の大争闘下巻 375)。

神の契約は、神とその民との間の関係の契約であることは、以前見てきたとおりです。そして、その契約の印、関係のしるしが安息日なのです。それは神がご自分の民のためになされる働きのしるしであり、神の民がこのお方に忠誠を表すしるしです。この神の印がすべての人に明らかにされる時が来ます。

「神の律法の反対者たちは、牧師からいちばん小さい者にいたるまで、真理と義務について新たな考えを抱く。彼らは第四条の安息日が生ける神の印であることを知るが、しかしもう遅い」（各時代の大争闘下巻 418）。

そうです。わたしたちは印する働きがなされている間に、それを知り、受ける必要があります。

では、印されるとは何を意味するでしょうか。

印されるとは何を意味するか、またどのように受けるのか？

古代、印する時には、封蝋に印を押しました。神の印も同様です。

「神よ、わたしの心は定まりました。わたしの心は定まりました。わたしは歌い、かつほめたたえます。{定まりました：もしくは、準備できました}」（詩篇 57:7）。

「彼は悪いおとずれを恐れず、その心は主に信頼してゆるがない」（詩篇 112:7）。

「神の民が自分の額に印されるちょうどその時、―それは見えるような印やしるしではなく、知的に霊的に真理に定着し、こうして彼らが動かされなくなることである」（SDA ﾊﾞｲﾌﾞﾙ・ｺﾒﾝﾀﾘ [E･G･ﾎﾜｲﾄ・ｺﾒﾝﾄ]4 巻 1161）。

そうです。神のかたちを受けて、定まり、変わらなくなるまで真理に定着すること、これが印されることなのです。

「なお、わたしが見ていると、見よ、小羊がシオンの山に立っていた。また、十四万四千の人々が小羊と共におり、その額に小羊の名とその父の名とが書かれていた」（黙示録 14:1）。

「彼らの額には、御名がしるされている」（黙示録 22:4）。

「この世において彼らの心は神にささげられていた。彼らは知性と心で神に仕えた。そして今、神は『その額に』神の名を記すことがおできになる。『そして、彼らは世々限りなく支配する』（黙示録 22:5）」（患難から栄光へ下巻 298）。

「生ける神の印は主の安息日を良心的に守る人々の上に押される」（SDA ﾊﾞｲﾌﾞﾙ・ｺﾒﾝﾀﾘ [E･G･ﾎﾜｲﾄ・ｺﾒﾝﾄ]7 巻 980）。

安息日の遵守を通して、御父との関係を保つ人々は、小羊のゆくところへはどこへでもついていき、ついにシオンの山に小羊と共に立ちます。彼らが十四万四千人であり、完全に神のものであるがゆえに、その額には神の名が記されているのです。

平和の契約

神の律法を守り、神との関係のうちにある神の民は、必ずこのお方の平和の契約を聞くようになります。

「また地のちりの中に眠っている者のうち、多くの者は目をさますでしょう。……」（ダニエル 12:2）。

「大地震が起こった。墓が開かれた。そして、第三天使のメッセージを信じ、安息日を守って死んだ人々が、栄化された姿で土の寝床から現れた。彼らは、神がご自身の律法を守った人々と結びたもう平和の契約を聞くのであった」（初代文集 460）。

「第三天使のメッセージを信じて死んだ者はみな、栄化されて墓から現われ、神がご自分の律法を守った者たちと結ばれる平和の契約を聞くのである」（各時代の大争闘 637）。

今、この印する時に

このように、神の印を受けるなら、神との関係を妨げ得るものはなく、死でさえ問題ではありません。

しかし、前回、見てきましたように、印する時はすでに始まっており、まもなく終わろうとしているのです！

「兄弟たちよ。それだから、ますます励んで、あなたがたの受けた召しと選びとを、確かなものにしなさい。そうすれば、決してあやまちに陥ることはない。こうして、わたしたちの主また救主イエス・キリストの永遠の国に入る恵みが、あなたがたに豊かに与えられるからである」（ペテロ第二 1:10-11）。

「今や、サタンはこの印する働きのときに当たり、あらゆる手段を用いて神の民の心を現代の真理から引き離し、彼らを迷わせようとしている」（1851 年）（初

代文集 107)。

「1844 年以来、第三天使のメッセージの預言の成就において、世界の注意は真の安息日に向けられ、神の聖日の遵守に帰る人々の数が絶えず増し加わっている」(預言の霊 4 巻 286)。

「愛する兄弟姉妹がた、神の戒めとイエス・キリストのあかしを常に心に抱いていよう。そして、それに世の思いと煩いを閉め出していただこう。寝る時も起きる時もこれを瞑想しよう。人の子の来られることを常に考えて生活し、すべての行動をとろう。印する時は、非常に短くやがて過ぎ去ってしまう。四人の天使が四方の風を引き止めている今こそ、われわれの召しと選びとを確かなものにする時である」(初代文集 130)。

そして、第 7 章に記された印する働きが完成し、神の民が平和の契約を聞いたのち、ついに第七の封印が解かれます。神の契約の完成です。

7. 第七の封印 : このお方が来られる時

「小羊が第七の封印を解いた時、半時間ばかり天に静けさがあった。」黙示録 8:1

「そのとき、人の子のしるしが天に現れるであろう。またそのとき、地のすべての民族は嘆き、そして力と大いなる栄光とをもって、人の子が天の雲に乗って来るのを、人々は見るであろう。また、彼は大いなるラッパの音と共に御使たちをつかわして、天のはてからはてに至るまで、四方からその選民を呼び集めるであろう」(マタイ 24:30, 31)。

「その日、人は言う、『見よ、これはわれわれの神である。わたしたちは彼を待ち望んだ。彼はわたしたちを救われる。これは主である。わたしたちは彼を待ち望んだ。わたしたちはその救を喜び楽しもう』と」(イザヤ 25:9)。

「まもなく、わたしたちの目は東へ向けられた。なぜなら、人の手の半分くらいの大きさの小さい黒雲が現れたからである。わたしたちはみなこれが人の子のしるしであることを知っていた。わたしたちはみな厳粛な沈黙のうちにその雲が近づき、明るくなり、輝き、栄光に満ち、そしてなおも栄光に満ちていき、ついに大きな白い雲となるまで見つめた。……そしてそこには人の子が座しておられ、そ

の頭には数々の冠があり、このお方の髪は白く巻いており、肩までかかっていた。このお方の足は火のようで、このお方の右手には鋭い鎌があり、左手には銀のラッパがあった。このお方の目は火の炎のようであり、このお方の子らを完全に探るのであった。そのとき、すべての顔は青ざめ、神を拒んできた人々は黒くなった。その時すべての人が、だれが立ち得るか、と叫んだ。わたしの衣にしみはないだろうか。そのとき天使たちは歌うのをやめ、そこには恐ろしい沈黙の時があった。そのときイエスが語られた。清い手と純潔な心を持つ者は立つことができる。わたしの恵みはあなたに対して十分である。……そのとき、イエスの銀のラッパが鳴り響き、このお方は雲の上に降りてこられた。そのとき、大地震があった。墓は開かれ、死人が不死をまとって出てきた。144,000 人は、死によって引き裂かれていた自分の友人を認めると、ハレルヤ！と叫んだ。そして同時にわたしたちは変えられ、彼らと共に空中で主に会うために引き上げられた。わたしたちは共に雲に入り、7 日間ガラスの海へ向かって昇っていった。そのときイエスは冠を携え、ご自分の右の手で彼らの頭にそれをのせて下さった。このお方はわたしたちに金の琴と勝利のしゅろを渡された」（The Day-Star1846 年 1 月 24 日）」（各時代の大争闘下巻 417-426 参照 , 教会への証 1 巻 60）。

オリブ山上で、このことがマタイ 24 章、マルコ 13 章、ルカ 21 章にイエスの預言のうちに、このお方によって教えられました。

黙示録において聖書のすべての書が出会い、そして終わる

「わたしたちはじっと立って神の救いを見なければならない時が来る。ダニエル書に語らせ、黙示録に語らせ、そして何が真理であるかを伝えなさい。しかし、提示される主題がどの方面であっても、イエスをあらゆる希望の中心として掲げなさい。……」（牧師への証 118）。

「黙示録には神の奥義が描かれている。……この預言に描かれている場面のあるものは過去に起こったものであり、あるものは今起こりつつある。またあるものはやみの権力と天の君との大争闘の終結を見させ、またあるものは新しくされた地に住むあがなわれた者たちの勝利と喜びを表している。……

ヨハネにこれらの奥義を表されたかたは、真理の熱心な探求者に天の事柄を前もって知らせて下さるのである。…….

黙示録において聖書のすべての書が出会い、そして終わる」（患難から栄光へ

下巻 288)。

ここに、わたしたちは神の贖いの計画の完成、神の契約の完全な成就を見ます。すでに封印は 6 つまで解かれました。まもなく最後の第七の封印が解かれ、すべてが完成しようとしています。このお方の契約に変更はありません。質問は、わたしたちはその中に入っているか、ということです。

わたしたちは家路についている

―わたしたちはどうであろうか？わたしは？

「『しかり、わたしはすぐに来る』。アァメン、主イエスよ、きたりませ」(黙示録 22:20)。

「毎週起こる恐ろしい災難について聞くとき、わたしは自問する。これらの事柄は何を意味しているであろうか。もっとも恐ろしい災害が次々と矢継ぎ早に起こっている。どれほど頻繁に、わたしたちは多大な人命と財産の損害を伴う地震や台風、火事や洪水による破壊について耳にすることであろう。一見、これらの災難は、秩序なく抑制されていない力が気まぐれに暴発したかのように見える。しかしこれらの中に神のご目的を読むことができる。それらはこのお方が男女を自分の危機感に目覚めさせる手段の一つである。

キリストの来臨はわたしたちが初めに信じた時よりも近づいている。大争闘はその終結に近づいている。神の裁きが地におこっている。それらは厳粛な警告を語り、次のように言っている、『あなたがたも用意をしていなさい。思いがけない時に人の子が来るからである』(マタイ 24:44)」(教会への証 8 巻 252)。

「主はまもなく来られる。だから、わたしたちは平安のうちにこのお方にお会いするための準備をしなければならない。自分たちの周囲にいる人々に光を与えるために、自分の力でなしうることをすべてなすことを決心しよう。わたしたちは悲しんではならない。かえって快活に主イエスをいつも目の前に保っているべきである。このお方はまもなく来られる。わたしたちは準備して、このお方の出現を待っていなければならない。ああ、このお方にお目にかかり、このお方に贖われた者として迎えられるとは、なんと栄光に満ちることだろう！わたしたちは長く待ってきたが、わたしたちの希望はかすんではいない。もしわたしたちが王をその麗しさのうちに見ることができさえすれば、永遠に祝福を受けるのである。わたしは次

のように叫ばないではいられない気がする、『家路についている！』わたしたちはキリストが力と大いなる栄光のうちに来られ、ご自分があがない代を払われた人々をその永遠の家に連れ帰られる時に近づいている」（教会への証 8 巻 253）。

「わたしたちは家路についている。わたしたちのために死なれるほどわたしたちを愛してくださったお方は、わたしたちのために都を建てて下さった。新エルサレムがわたしたちの休息の場所である。神の都には何の悲しみもない。悲しみの叫び、砕かれた望みや葬られた愛情の葬送歌も、永遠に聞かれることはない。まもなく重苦しさの衣は礼服に変えられる。まもなく、わたしたちは自分たちの王の戴冠式を目撃することになる。自分の命をキリストと共に隠してきた人々、この地上で信仰の良き戦いを戦ってきた人々は、神の御国で贖い主の栄光をもって輝き出るようになる。

わたしたちが自分の永遠の命の希望が集中しているお方を見るのは遠い先のことではない。そしてこのお方のご臨在のうちに、この世の生涯のすべての試練と苦難は消えてなくなってしまう」（教会への証 9 巻 287）。

「天国はよい場所である。私はそこにいって、私のためにご自分の生命を与えてくださった愛するイエスをながめ、その栄光あるみかたちに変えていただきたいと熱望している。ああ、来たるべき輝かしい世界の栄光を言いあらわすことばがほしい。私は神の都を喜ばしいものにしている生命の水の流れを渇望している」（ｱﾄﾞﾍﾞﾝﾁｽﾄ・ﾎｰﾑ 627）。

わたしたちはアドベンチスト、すなわち主の再臨を待つ者ですが、本当に待っておられるのはどなたでしょうか。このお方がはじめから祈っておられるのは何でしょうか。ここにわたしたちの希望があり、保証があります。

このお方のみ約束を覚えよ！

「またきて、あなたがたをわたしのところに迎えよう。わたしのおる所にあなたがたもおらせるためである」（ヨハネ 14:1-3）。

「わたしの父の国であなたがたと共に、新しく飲むその日までは、わたしは今後決して、ぶどうの実から造ったものを飲むことをしない」（マタイ 26:29）。

「父よ、あなたがわたしに賜わった人々が、わたしのいる所に一緒にいるようにして下さい。天地が造られる前からわたしを愛して下さって、わたしに賜わった栄光を、彼らに見させて下さい」（ヨハネ 17:24）。　　**完**

（50 ページの続き）

このお方はひばりが創造主にむかってさえずる音楽を聞かれ、そしてそのみ声はよろこばしい賛美の歌と感謝にくわわるのでした。

歌の声で、このお方は朝日を迎えられました。夜明けに、このお方がどこか静かな場所で神さまについて考えておられるか、聖書を研究するか、または祈っておられるかするのがよく見られました。

こうした平和な時間から家に戻ってこられると、このお方はふたたびなすべき義務にとりかかり、忍耐づよい骨折りの模範を残されました。どこにおられても、このお方のご臨在（りんざい：いらっしゃること）は天使たちを近くに呼ぶかのようでした。このお方の純潔な、聖なる生活の感化は、あらゆる階級の人々に感じられました。

傷なく汚されることなく、このお方は無分別な人々、粗野（そや）な人々、また無礼な人々の間を歩まれました。不正な取税人たちや、でたらめな放蕩者たち、よこしまなサマリヤ人たちや異教の兵士たち、荒れくれた農夫たちの間を歩まれたのでした。

このお方は疲れ果ててもなお重荷を負わなければならない人をごらんになると、同情の言葉をこちらで一言、あちらで一言お語りになりました。このお方は彼らの重荷を共に負い、彼らに神の愛と親切さ、善についてご自分が自然から学んだ教訓をくり返されました。

このお方は彼らに、自分自身を貴重なタラントを持っているものとしてみなすようお教えになりました。そのタラントは正しく用いるなら永遠の富を得させるのでした。ご自分の模範によって、このお方は時間の一刻一刻に価値があり、それらが有益なことに用いられるべきことをお教えになりました。

このお方はどんな人も価値のないものとして見過ごしになさらず、とても乱暴で、最も見込みのない人でも勇気づけようとなさいました。このお方は彼らに、神さまは彼らをご自分の子として愛され、そして彼らも品性においてこのお方に似た者となることができるとお語りになりました。

このように静かな方法で、イエスさまはごく幼年のころから他の人々のために働かれました。学識ある先生たちも、イエスさまご自身の兄弟たちも、イエスさまにこの働きをやめさせることはできませんでした。まじめな目的をもって、ご自分の一生のご計画を実行なさいました。なぜなら、このお方は世の光となるべきだったからです。

ホワイトシチュー

■材料

たまねぎ	2 個
人参	1 本
じゃがいも	3 個
マッシュルーム	1 パック
チンゲン菜	2 束
ココナツミルク	1 缶
塩	小さじ 1
ガーリックソルト	小さじ 1/2
野菜コンソメ顆粒	1 本 (4g)
小麦粉	大さじ 3

■作り方

1. たまねぎを2㎝くらいの角切り、人参を7-8㎜くらいの輪切り、マッシュルームを 5㎜くらいの輪切り、じゃがいもを 2㎝くらいの角切り、チンゲン菜を 3㎝くらいに切ります。
2. 厚手の鍋にオリーブ油（材料外）を敷いて、たまねぎ、マッシュルームを炒めます。
3. あらかた火が通ったら、人参を入れ、塩で下味をつけます。
4. 全体を混ぜて、あらかた火が通ったら、じゃがいもを入れ、材料がかぶるくらいに水を入れ、ガーリックソルトと野菜コンソメ顆粒を入れます。
5. 煮えたら、チンゲン菜とココナツミルクを入れてよく混ぜ、塩味を調整します。
6. 味がととのったら、2/3 カップくらいスープを深めのお皿にとっておきます。
7. とっておいたスープが冷めたら、だまにならないように小麦粉とよく混ぜて、鍋に入れます。
8. とろみがつくまで、こげないように混ぜます。全体がなじんだら出来上がりです。

教会プログラム (毎週土曜日)

安息日学校：9:30-10:45（公開放送）

礼拝説教：11:00-12:00（公開放送）

午後の聖書研究：14:00-15:00

【公開放送】http://www.4angels.jp

聖書通信講座

※無料聖書通信講座を用意しております。

□聖所真理

お申込先：〒 350-1391　埼玉県狭山郵便局私書箱 13 号「福音の宝」係

是非お申し込み下さい。

書籍

【永遠の真理】聖書と証の書のみに基づいた毎朝のよみもの。

【安息日聖書教科】は、他のコメントを一切加えず、完全に聖書と証の書のみに基づいた毎日の研究プログラムです。

イエスの物語

第 12 話　戦いの日々（II）

ナザレは悪い町でした。そして、子どもや青年たちはイエスさまを自分たちの悪い道に従わせようとしました。このお方は明るく快活でしたので、彼らはこのお方と一緒にいるのが好きでした。

しかし、このお方の信心深いかずかずの原則は彼らの怒りを引きおこしました。何か禁じられた行為をいっしょにするのを断わると、よくこのお方は臆病者（おくびょうもの）と呼ばれました。あまりにも小さいことに厳密（げんみつ）すぎるとあざけられました。こうしたすべてに対して、このお方の答えは「こう書かれている」でした。「主を恐れることは知恵である、悪を離れることは悟りである」（ヨブ 28:28）。悪を愛することは死を愛することです。なぜなら「罪の支払う報酬（ほうしゅう）は死である」からです（ローマ 6:23）。

イエスさまはご自分の権利(けんり)を主張なさいませんでした。乱暴(らんぼう)なあつかいを受けても、それに忍耐づよく耐えられました。このお方は何でもいとわず、また不平を言われないので、不必要なまでに仕事をたくさんさせられることがよくありました。しかし、このお方は神さまがご自分にほほえんでおられることをご存じでしたので、失望（しつぼう）なさいませんでした。

このお方の最高に幸せな時間はひとりで自然と、また神さまといる時間でした。ご自分の仕事が終わると、このおかたは野原に入って行かれ、緑の谷間で瞑想（めいそう）したり、山腹（さんぷく）や森の木かげで神さまに祈ることを愛されました。

（47 ページに続く）